

## その十五

公共事業を中心とした建設業が不況にあえいでいるのは、一般的に認知されていることのようにいて、どうやら今でも、「建設業は儲けすぎ」だという空気のようなのは根強いようです。「談合」「癒着」といった公共建設業を語るうえで欠かすことができない（と思われる）キーワードが、どこか「水戸黄門」に出てくる「悪徳業者」を想像させているのかもしれない。などと言っては、あまりにも妄想的でしょうか。

勿論、あんな話が世の中にそうそうある筈もなく、単なるステレオタイプであるのは自明のことなのですが、デリケートな問題を含んだそのことについて、私たちが代表して反論をする人もなく、大半の現場の技術者は黙々と「モノづくり」に励んできました。

そんななか、私たちが主張できるのは公共建設業の社会的役割であるとか、社会資本整備の正当性であるとかであり、自分たちは、

例えば積極的な「地域貢献」をすることによって、地域社会にとって必要な存在であるとかをアピールする、ことではないのも事実です。そしてそれを訴えていくのは戦略的には確かに間違いではないのかもしれませんが。むしろ私が言うように、「利益」や「儲け」を、世間に対して大っぴらに口に出すほうがより反発を買うのかもしれないとは思いますが。しかし「使命感」や「倫理」を指標として企業は存在しているではありません。「お金儲け」がその第一義としてあるのです。ただ、私たちの営みが基本的に違うのは、それが社会資本を造るといふ行為を通して行われるという点なのです。それは「モノづくり」と引換にした「金銭」、という直接的なやりとりではなく、社会資本を造るといふ行為を「迂回」して達成される「儲け」。言い換えれば、技術の「贈与」に対しての報酬とでもいうようなものな

の  
で  
す  
。